さっぽろ雪まつり - 雪まつりの歴史

さっぽろ雪まつりは 1950 年の冬、中高生らが美術教師の監督の下、大通公園の一角に 6 基の雪像を作ったことから始まりました。犬ぞりレースやスクエアダンス、雪合戦、そして旗を使ったチーム対抗雪合戦大会も開催されました。この雪まつりは気楽に雪を楽しむイベントで、約 50,000 人が参加しました。イベントの規模は徐々に大きくなり、それ以来 2021 年を除き毎年開催されています。

1955 年からは陸上自衛隊の隊員が雪まつりに協力するようになりました。札幌駐屯地は自衛隊の中でも最大規模の方面隊である北部方面隊の拠点となっています。1959 年には 2,500 人の自衛隊員が大型雪像の制作に参加しました。今では雪まつりの象徴となっている巨大雪像の制作において、隊員らの工学・兵站技術は大いに役立ちました。

1972 年には札幌は冬季オリンピックを開催し、雪まつりは国際的にも注目を浴びることとなりました。神話上の人物ガリバーの高さ 25 メートルの雪像は、その年のフェスティバルで人々を歓迎し、オリンピックのメディア報道で取り上げられ、フェスティバルの認知度を高めました。

1974 年は雪まつりにとって成長の年であるとともに、苦難の年でもありました。国際雪像コンクールが初めて開かれた年であり、6 ヶ国のチームが参加しました。参加チーム数は年によって異なり、日本からは 1998 年には 20 チーム、2020 年には 12 チームの参加が見られました。1974 年の苦難は世界的なオイルショックのためトラックを使った雪の搬入と圧雪のための燃料が不足したことによります。例年よりも使用できる雪が少なかったため、雪像の基礎部分にはドラム缶を使ってスペースを埋めました。しかし、中心部の雪が少ないために、例年より早く溶け始めてしまい、雪まつり閉幕までに崩壊するおそれもありました。

1979 年には、日本人芸術家・岡本太郎（1911～1996）制作の雪像により、雪まつりへの注目度がさらに高まりました。岡本は 1970 年に大阪で開かれた万国博覧会のために建てられた「太陽の塔」の作者として有名です。

1983 年には歓楽街であるすすきのが、また 2009 年には冬季用遊戯施設つどーむが会場に加わりました。すすきの会場はアイスワールドで精巧な氷像を制作・展示し、雪まつりに氷の要素を取り入れました。つどーむ会場からは、氷やトンネル型すべり台などアウトドアアクティビティや、どの世代でも楽しめる体験型アクティビティという新しい要素が加わりました。

2013 年には、プロジェクションマッピング技術により雪像に動きや色、音がもたらされました。これにより来場者数にも著しい増加が見られ、今では毎年 200 万人以上がさっぽろ雪まつりを訪れます。